

報 告

第 19 回全国高等学校情報教育研究会全国大会（神奈川大会）

第 19 回全国大会（神奈川大会）実行委員長
神奈川県高等学校教科研究会情報部会長
神奈川県立百合丘高等学校長

柴田 功

1. はじめに

全国の都道府県等における情報教育に関する研究会が加盟（加盟数：41）する全国高等学校情報教育研究会では、全国の情報教育関係者が一堂に会し、情報科における実践的な指導力の向上を図ることを目的として、2008 年度から年 1 回、全国大会を開催している。

第 19 回全国高等学校情報教育研究会全国大会（神奈川大会）は、2026 年 8 月 7 日（金）・8 日（土）の 2 日間、神奈川大学横浜キャンパスを会場として開催した。神奈川県での開催は、第 9 回大会以来 10 年ぶりとなった。今回の大会は、次期学習指導要領の改訂に向けた検討が進められている時期での開催となったが、この状況は、前回の神奈川大会が開催された当時とも共通している。そこで、第 9 回大会のテーマ「情報教育の本質を見極める」を継承し、第 19 回大会では「今、改めて情報教育の本質を考える」を大会テーマとして設定した。

また、サブテーマには「情報科の力の結集」を掲げた。情報教育の中核を担う情報科に携わる学校、行政、企業等の関係者が垣根を越えて力を結集し、参加者にとって新たな挑戦への意欲が湧く場となることを願い、このサブテーマを設定した。



図 1 大会看板

2. 大会概要

大会テーマに込めた思いは 2 日間を通して共有され、会場が熱気に包まれる中、盛会のうちに大会を開催することができ、参加者数は 689 名と過去最多となった。大会の概要は次のとおりである。

■ 1 日目：2026 年 8 月 7 日（金）

- 12 : 30 開会行事
- 13 : 00 基調講演
- 14 : 20 ポスターセッション／企業展示
- 15 : 30 分科会（セッション 1・2・3）
- 17 : 00 大会 1 日目終了
- 17 : 30 教育懇談会

■ 2 日目：2026 年 8 月 8 日（土）

- 9 : 00 分科会（セッション 4・5・6）
- 10 : 30 ポスターセッション／企業展示
- 11 : 30 昼食・休憩
- 13 : 00 分科会（セッション 7・8・9）
- 14 : 45 講演
- 15 : 45 閉会行事
- 16 : 15 大会 2 日目終了

なお、大会スケジュールや発表論文等を掲載した大会冊子については、第 14 回大会から、参加者が各自 Web 上で購入する方式としている。

2-1 開会行事（1 日目）

開会行事では、開催地を代表して倉田慎一氏（神奈川県立茅ヶ崎西浜高等学校長）が開会のことばを述べた後、全国高等学校情報教育研究会を代表して福田順子会長（東京都立小平西高等学校長）が挨拶に立った。続けて、ご来賓の小原美枝様（神

奈川県教育委員会教育局指導部高校教育課専任主幹兼指導主事)、秋吉正徳様(神奈川大学副学長)からご祝辞をいただいた。



図2 開会行事の様子

2-2 基調講演(1日目)

満員となった講堂では、神奈川大学情報学部の山口高平教授が、「人と連携できる生成AIシステムに向けて」と題して基調講演を行った。

人工知能研究の変遷や、人間中心のAIの開発などについての講演を通して、これからの情報教育はどうあるべきかを改めて考える機会となった。

特に、次期学習指導要領における情報科の授業では、AIを活用するだけでなく、AIの仕組みそのものを学ぶことも想定されており、これからの時代には「生成AIプロデューサー」となることが求められるというメッセージが示された。



図3 基調講演を行う山口高平教授

2-3 ポスターセッション(1・2日目)

天井が高く開放感のある講堂いっぱいに84のブースを設け、43件のポスター発表と41社の企業展示を同時に行った。ポスター発表者は、高校教員だけでなく、大学教員、行政関係者、学生な

ど多岐にわたった。発表内容についても、「情報Ⅰ」「情報Ⅱ」の指導実践をはじめ、アプリケーションの開発、各種調査報告など、幅広いテーマが取り上げられ、多様な視点から活発な発表と意見交換が行われた。

以下、ポスター番号と発表題目をそれぞれ示す(サブタイトルは割愛)。

- 01 『試して考える』統計学習アプリケーションの開発
- 02 スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校における情報科目の開講状況
- 03 生徒全員が学習する情報Ⅱの授業
- 04 探究的なプログラミング教育を実現するための授業とは
- 05 授業力向上のためにできること
- 06 映像コンテンツを活用した授業実践からみるその歴史と今後の展望
- 07 AIは私たちの「動き」をどう見分けるのか
- 08 小中高一貫校における情報教育のあり方と技術科の立ち位置
- 09 実践的な入力技能の定着をめざす高校生向けタイピング習得支援システムの開発と実践
- 10 我々は「情報」を理解して授業しているか?
- 11 生成AIを活用した授業内容に応じた振り返りプロンプトの生成と「情報Ⅰ」での実践
- 12 生成AIを活用したプレゼンテーションスライドの評価
- 13 キーホルダー科の先生になります
- 14 ICT機器利用と健康問題に対する主体的な行動変容を促す教科横断型授業
- 15 情報Ⅱに向けた生徒目線のデータサイエンス
- 16 JAEIS Podcast を通じた情報科教員のコミュニティ形成の試み
- 17 情報Ⅱで使用可能なConnect DBのクラスタリング学習機能
- 18 グループワークを中心にした授業展開
- 19 生成AI時代に問い直す情報教育の本質
- 20 くるくるデータサイエンス
- 21 全高情研で学んだ事例を夜間定時制の授業でやってみたPart2

- 22 Web 版キーボード体操によるタッチタイピング初期教育
- 23 授業でAI と相談しながら設計するソフトウェア開発支援ツールの提案
- 24 学習用ロボット ZRobot V3
- 25 AI × データ分析による体験型ワークショップの設計と教材開発
- 26 「情報」を大学入試に導入して見えたこと
- 27 修学旅行を題材としたWeb サイト制作
- 28 情報Ⅰにおける生成AI の授業活用
- 29 生成AI の回答を比較・検討する授業実践
- 30 SSDSE を使ったデータ分析の実践報告
- 31 大学情報入試：共通テストと個別試験
- 32 AI 時代のプログラミング授業は何を教えるべきか
- 33 モデル化とシミュレーション学習支援ツール「MoSiCa+」を活用した授業の提案
- 34 高校生の生成AI リテラシー教育
- 35 数学（統計分野）の学習時期を意識した情報Ⅰにおける統計分野の授業実践
- 36 SNS の適切な利用とは？
- 38 高校入学時点で9割の生徒が生成AI を経験済み
- 39 生成AI 時代におけるプロセス評価の実践
- 40 プログラミングに対する生徒の苦手意識の軽減を目指した授業実践
- 41 色のデジタル化 3つの調理で教科横断型授業
- 42 探求の授業を考慮した情報Ⅱのデータサイエンス授業
- 43 情報Ⅰにおける実習と言語活動の順序が概念理解に与える影響
- 44 情報科教員を支える実践事例のネットワーク

2-4 企業展示（1・2日目）

企業展示では、2日間を通して、学習教材のデモンストレーションや資料提供などが行われ、参加者にとって、今後の授業づくりに生かすための貴重な情報収集の機会となった。

また、出展企業からは協賛金をはじめとする多大な支援をいただいた。これらの支援により、充実した大会運営と快適な会場環境を整えることができ、参加者の満足度を高めることにもつながった。



図4 ポスターセッション会場の様子

2-5 分科会（1・2日目）

2日間にわたり、4会場に分かれて9つのセッションを実施し、計36本の分科会発表が行われた。分科会発表には、採択数の約1.4倍の申し込みがあった。選考にあたっては、公平性を確保するため、所属や発表者名を伏せた上で発表要旨を精査し、実行委員会全体で慎重に選考を行った。

また、選考の結果、分科会発表に採択されなかった場合でも、ポスター発表に申し込むことができるよう、申込期間を工夫して設定した。

各分科会の発表時間は、質疑応答を含めて25分とした。いずれの会場でも活発に質問や意見が交わされ、発表者と参加者が共に新たな気づきを得る貴重な機会となった。



図5 分科会発表の様子

以下、セッション1～9、分科会会場1～4の発表番号と発表題目をそれぞれ示す（サブタイトル割愛）。

- 1-1 トイレ数の課題への待ち行列の適用
- 1-2 生徒のつまずきから考える授業実践
- 1-3 デザイン×AI×ビジネス
- 1-4 生成AIを『疑って使う』力をどう育てるか
- 2-1 専門学科情報科におけるAI・データサイエンス教育の実践

- 2-2 『伝える力』から始めるプログラミング学習
- 2-3 この素晴らしい情報Ⅰに情報法を！ 2
- 2-4 AI 時代に何を問い続けるか
- 3-1 教科「情報」的アプローチで行なう探究学習の授業実践
- 3-2 コピーライティングを行う情報デザインの授業実践
- 3-3 生成 AI をモデル化支援チューターとして活用したシミュレーション学習の実践とその効果
- 3-4 情報Ⅰ・Ⅱの特性に応じた生成 AI アプリ開発実習の設計と実践
- 4-1 マイコン製作からコンピュータの仕組みを学ぼう
- 4-2 生成 AI 時代の知的財産権学習を「使える知識」にする授業実践
- 4-3 小さな実習で学ぶ情報Ⅰ
- 4-4 生成 AI 時代を見据えた中等教育における高度 AI カリキュラムの構築
- 5-1 自作 Web 教材『じょうほうらいふ』の開発と情報Ⅰにおける活用実践
- 5-2 情報Ⅱにおける情報技術を活用した探究活動の実践
- 5-3 生成 AI を活用した教材開発のパラダイムシフト
- 5-4 自己有用感を醸成する情報デザインの指導方法の模索 2
- 6-1 故人 AI を題材とした生成 AI と自分の関係を「考える」授業の模索
- 6-2 「問題づくり」を通してプログラムについての理解を深める授業実践
- 6-3 情報Ⅰにおけるディベートの実践と単元横断による時間の捻出
- 6-4 情報Ⅰを貫く“デザイン”の視点
- 7-1 情報Ⅱにおけるデータ収集システム構築と多変量分析の統合的指導
- 7-2 micro:bit と 3D プリンタを活用した協働的ものづくり学習の実践
- 7-3 T 高校における画像編集を題材とした情報Ⅰの授業実践
- 7-4 「代行」を「伴走」に変え生徒の思考をブーストさせる生成 AI のあり方
- 8-1 アウトプットから始める授業
- 8-2 生成 AI ×Python で挑む「モデル化とシミュレーション」

- 8-3 高等学校情報科は何をつなぐのか
- 8-4 生成 AI を活用した短時間でアプリ開発を体験させる授業の提案
- 9-1 生徒を「主役」とした情報Ⅱの授業実践と情報教育の今後の展望
- 9-2 生成 AI を対話の相手として活用した情報デザイン授業の実践報告
- 9-3 生成 AI を「思考の外骨格」とする高校情報Ⅰの授業実践
- 9-4 データを活用した情報デザインに関する授業実践

2-6 教育懇談会（1日目）

1 日目の全日程終了後、神奈川大学の食堂を貸し切り、高校・大学の教員、行政関係者、企業関係者などが立場の垣根を越えて情報交換や交流を深める教育懇談会を開催した。全国各地から 233 名が参加し、所属や地域、世代を越えて積極的な交流が行われ、会場は終始熱気に包まれた。

大会のサブテーマとして掲げた「情報科の力の結集」をまさに体現し、新たな挑戦に向けた意欲を互いに高め合う貴重な場となった。

2-7 講演（2日目）

2 日間にわたるすべての発表終了後、参加者が再び一堂に会し、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官等を務める須藤祥代氏が、「情報科の現在と未来～情報科の本質とは何か～」と題して講演を行った。

豊富なスライド資料を用いながら、中央教育審議会教育課程部会「情報・技術ワーキンググループ」における最新の検討状況をはじめ、生成 AI を活用した学びの在り方などについて、充実した内容の説明があった。次期学習指導要領に向けた検討が進む中、情報科の学びにおいて何が変わらず、何が変わっていくのかを見つめ直す内容であり、大会テーマである「今、改めて情報教育の本質を考える」を締めくくるにふさわしい講演となった。



図6 須藤祥代氏による講演の様子

2-8 閉会行事（2日目）

閉会行事では、本大会実行委員会を代表して、実行委員長である本稿筆者の柴田功（神奈川県立百合丘高等学校長）と、事務局長の鎌田高德氏（神奈川県立横浜国際高等学校教諭）から、会場校をはじめ、参加者、発表者、協賛企業・団体、運営スタッフなど、大会を支えてくださった方々への謝辞を述べるとともに、2日間の大会を振り返った。

続いて、次期開催県である島根県を代表して、小林努氏（島根県立出雲高等学校長）から、第20回記念大会となる島根大会の開催に向けた意気込みと、島根県の魅力を紹介するプレゼンテーションが行われた。



図7 次期開催県代表の小林努校長あいさつ

最後に、本大会の副実行委員長である小林道夫氏（神奈川県立附属中・高等学校長）が閉会のことを述べ、2日間にわたる大会の幕を閉じた。



図8 希望者による閉会後の記念撮影

3. おわりに

こうして、第19回神奈川大会は、全国から情報科をはじめとする情報教育に携わる多くの関係者が一堂に会し、大会テーマである「今、改めて情報教育の本質を考える」のもと、情報教育の本質とは何かについて共に考え、議論を深める、熱気に満ちた2日間となった。

本大会の開催にあたり、ご臨席いただいたご来賓の皆様、多大なるご支援をいただいた協賛企業・団体の皆様、貴重な実践や研究成果をご発表いただいた皆様、全国各地からご参加いただいた皆様、快適な会場をご提供いただいた神奈川大学の皆様、そして、大会の準備・運営に尽力してくださったすべてのスタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。

第20回記念大会は、2027年8月10日（火）・11日（水）に島根県産業交流会館くびきメッセで開催される予定である。神奈川大会で生まれた熱気を次の大会へとつなぐためにも、大会運営を通して得られた成果と課題を整理し、島根大会へしっかりと継承していきたい。

そして、これからのAI時代を生きる子どもたちのために、島根の地で再び全国の情報科に携わる関係者が集い、「情報科の力」を結集することで、第20回記念大会がさらに充実した大会となることを願っている。



図9 裏方で大会を支えた運営スタッフ